

東日本大震災を振り返って

宮城県石巻商業高等学校教諭 宇都宮 康弘

はじめに

本校は、「独立自尊」を校是とする、百年の歴史と伝統を持つ商業高校です。平成18年度から男女共学化を機に、従来の3つの小学科を一つの学科に統合して「総合ビジネス科」に学科改編。また、校舎大規模改修工事の完成により施設設備を一新。さらに、平成19年度からは石巻専修大学との高大接続研究事業を実施し、さらなる教育環境の充実を図っています。平成23年11月11日には、創立百周年記念式典を開催しました。

1. 東日本大震災直後の状況

平成23年3月11日午後2時46分に地震が発生し、約6分間縦・横揺れの激震が走りました。当日は、入試関連の業務中で、生徒は家庭学習日でした。それでも、学校には100人前後の生徒が部活動や補習に来ていました。地震が起こり、校舎内が激しい揺れで職員室内・図書館内など足の踏み場もない状況になり、また、校庭は液状化現象が起こり避難が無理なため、校舎前のアスファルトの駐車場に避難しました。天候は雪が降っており、駐車場に石油ストーブを設置し寒さをしのぎました。その後、大津波警報が鳴り、「かなり大きな津波が来る、高台へ避難するように」との避難指示が出ました。避難していた駐車場から直ちに校舎内に避難しました。また、車のラジオや、携帯電話のテレビなどで10mを超える津波が押し寄せているという情報をこの時初めて耳にし、第一波が石巻市を直撃、隣接する川にすごい勢いで押し寄せました。その直後、今まで避難していた場所を1mの津波が襲い、石油ストーブと駐車してあった車が水没しました。そして、職員、生徒、生徒を迎えに来ていた保護者の方々も校舎3階へ避難しました。その時、校舎前の北上川をがれきと一緒に遡上する津波を見ました。

学校は地震により、停電、断水となり、ライフラインがすべて止まりました。携帯電話も不通になり、外部からの情報が遮断されました。さらに、職員駐



校舎南側の北上川をさかのぼる津波

車場に置いていた職員の3分の2の車も、何回かの津波にその日の満潮も加わり、水没しました。その水が校舎1階に入り普通教室・特別教室の一部が床上浸水しました。

震災後、職員で何とかこの事態に対処すべく、校舎内にある飲み物や、食べ物、毛布や布団などを一か所に集め、石油ストーブで、硬式野球部が持っていた白米を炊き、避難者の皆さんに配給しました。その日は非常に寒く、カーテンを毛布代わりにしたり、段ボールを敷布団代わりにしたりするなどして寒さに耐えました。

次の日、被災をしなかった職員の車で物資（水、米）の調達などを行いました。

2. 避難所として

本校の北側の運動公園に自衛隊の基地が設置され、自衛隊のヘリで救助された女川町出島の約200人の方々と、石巻市内の100人の方々が、着のみ着のまま本校に避難してきました。ここにきて、ようやく周辺の被害状況が分かりだし、石巻市内全地区が水没し、支援物資が届けられずにいるなど、深刻な状況を初めて知ることになりました。

避難所としての機能が定着し、日本赤十字の医療団が定期的に訪問するようになりました。職員でローテーションを組み、当番で当直制度を作りました。石巻市からも職員が派遣されました。そして、仮設

トイレも設置され、衛生的な環境が徐々に出来ていきました。また、NPOの方々との支援で、朝・夕の炊き出しをしていただきました。暖かい食事が取れる喜びを噛みしめながら食べることが出来ました。その後、全国各地から支援が届き始め、沢山の食料や、衣料品が届けられるようになりました。

3. 生徒の安否確認

生徒の安否確認のため、卒業生も含め職員で情報収集にあたりました。しかし、道が寸断され、目的地まで行くことが困難な場所もありました。残念ながら10名の生徒が亡くなりました。また、両親や祖父母、兄弟妻子を亡くした職員もいました。

4. 新学期に向けての準備

4月下旬に学校のライフラインが復旧するめどが立ち、予備登校日を設け、生徒の安否状況や人的被害、家屋被害、通学方法などの聞き取り調査を行いました。その中で、地盤沈下の影響で冠水した地区があり、また、JRの鉄道が流されたため、登下校が困難な状況でもありました。石巻地区の道路の復旧や、JR代行バスの代行交通機関などが整備され、4月21日に再開し無事、始業式・入学式を行うことができました。

5. がれき問題が起きる

学校裏に市有地があり、震災のがれきの置場となりました。その影響で、悪臭や、粉じん、夏場になると、ハエの大量発生など様々な問題が起きました。その支援として、マスクや空気清浄器などが日本赤十字社をはじめとしていろいろなところから送られてきました。この問題はテレビや新聞など全国で報道されました。今現在もがれき等が置かれたままになっております。

6. 世界各地からの応援

各地から被災地支援として、励ましの声や救援物資の提供などがありました。中でも、ノルウェー王国のエルケム社から太陽光発電装置を寄贈されました。また、全国商業高等学校協会主催の検定試験および認定試験の受験料を免除、沢山の全国の高等学校の皆さんより励ましの言葉や、義捐金などをいただきました。本当にありがとうございます。

7. 震災後の本校の取り組み

震災後は、生徒たちは一丸となって学校行事や部活動に取り組んでいきました。平成23年11月11日に行われた百周年記念式典では、多くのご来賓の方々にお褒めの言葉を頂くほどの素晴らしい式典を

生徒たちが実現しました。また、文化祭では「全力疾走～千年に一度を乗り越えて～」という復興をテーマにし、例年以上に盛大に開催することが出来ました。部活動に関しても、硬式野球部が、がれきによる粉じんなどの影響で連日マスクをしながらの練習をしてきました。秋季野球大会宮城県予選でベスト4に入る快挙を成し遂げることができました。また、軟式男子テニス部も宮城県総合体育大会においてベスト4に入り、被災した北上川で練習を重ねてきたカヌー部は、ままならない環境の中でも諦めず練習を積み重ね、インターハイ・国体入賞するなどの成績を上げました。さらに、簿記部は、個人全国大会出場、珠算部は、団体・個人で全国大会出場、英語スピーチコンテストにおいて、全国大会出場という成果を上げることができました。

8. 今後取り組んでいきたいこと

東日本大震災から9ヶ月が過ぎましたが、まだいたるところで震災当時のままの姿で残っている建物や場所があります。被災を受けたこの地元を元に戻し、当時の活気あふれる町を取り戻したいという気持ちを持っている生徒も数多くいます。これから商業教育を進める上で、生徒たちの気持ちを実現できるような教育が更に重要視されていくものと考えております。そして、生徒や地域の実態を踏まえながら、本校が育成していきたい人材像を明確にし、それを実現していけるよう教育内容を目指して取り組んで行かなければならないと考えております。

おわりに

今回の震災において、生と死とは紙一重であったことを改めて実感しました。ライフラインも止まり、食料もない中、生きていくためにはお互いを思いやり協力していく気持ちが一番大切なことだと実感しました。また、多くのボランティアの皆さんからのご支援、様々な方々の支えがあって今を迎えることができました。そして、この経験を忘れることなく、後世へしっかりと伝えられるようにしていきたいと思っています。また、町の復興を願う子供たちのためにも、今後、商業高校としての使命を自覚し、復興に向けた取り組みを進めていきたいと考えています。末筆ではございますが、このような機会を与えてくださった実教出版株式会社の皆様に感謝申し上げます。